

文＝五月女善重  
(五月女総合プロダクト)

## さよならの向う側

ハタダ部長は、僕が営業本部長を務めていた十年ほど前、同業他社から転職してきました。人格者である部長の口癖は「それは絶対やったらアカン」です。『なるほど、やってはいけない事を提示するのは、それ以外は自由という意味もあり、伸び伸びとした職場環境を作るのだ』と、その教育手法に感心したものです。

僕よりもだいたい5年上で、肺を患っており、入社したときには既に片肺が切除されていました。無理がきかないのを分かっていた

今回で、本連載も最終話となります。コラムのお話を聞いたときは「僕で大丈夫だろうか」と不安が先に立ちましたが、「パチンコ企業の二代目」というニッチな描写をできる者も限られるのでは？という使命感から、二代目ならではの境遇や、後継者にしか理解しえない心理などを綴ることにしました。

引き受けたからには、誰もが「思っていたけど、口に出せなかった部分」まで書いてしまおうと思えました。業界から逃げ出したいと思ったことも正直に書かせていただきました。敢えて、自分や、業界の二代目・三代目を「おぼっちゃん」と表現したこともあります。

人に何かを話すとき、「こういう事がありました」という「事実」だけを言っても、思うように伝わりません。自分の「考え」や、もつと深く掘り下げると「感情」まで盛り込み、「こういう事実があって、そのとき僕は悔しかった、嬉しかった、悲しかった、激怒した」という部分まで表現してはじめて、相手は納得するように思います。

るので「できる範囲でやってくださいね」と言っても、そういう人ほど頑張ってしまう。4年ほど前にお亡くなりになりましたが、部長が熱心に教育していたバイトスタッフが店長となり、今でも時折り「ハタダ部長はこんな事を教えてくれましたよね」と口にします。むやみに泣くことを良しとしない僕も、葬儀の席で奥様から「主人がいつも『最後にいい会社に入れて良かった』と言っていました」と聞かされ、初めて人前で涙したものです。

第三者に心の奥底を見せるのは、自分の「弱さ」までも晒すこと



さおとめ・よししげ

五月女総合プロダクト株式会社代表取締役社長。大学卒業後、父親の営む建築資材会社を経て、26歳でホール業界に。釘調整など現場仕事を経験する中で「自分の代になる」という強い意思のもと2000年に屋号をライブガーデンに変更、2003年代表取締役就任。「スタッフが主役の会社づくり」を掲げ、栃木県南部を中心に現在10店舗を運営。1965年生まれ。筆者へのメッセージはホームページから <http://www.saotomesp.jp/>

になりますから、想像以上に勇気のいる作業でした。また、対人において「こんな発言をしてはいけないのではないかと」と、コラムの中の自分に支配されてしまった時期もあります。

しかし連載が進むうち、全国の二代目・三代目諸氏から「私も同感です」「共感しました」という有り難い声をいただくようになったのです。普通に過ごしていたら接点を持てないような方にもお会いできました。この場をお借りしてお礼申し上げます。ありがとうございました。

同じ立場の方々とお話する中で気付いたのは、基本的に僕たちは孤独で、その思いを共有することでとても温かい気持ちになれるということでした。

出会い、別れ、出会い。  
すべてに感謝して、また皆様とどこかでお会いできますことを切に願いつつ、2009年が暮れてゆきます。

Thank you for your everything. A